

【ポスター発表】

相談援助演習における「沈黙」の意味とノンバーバルコミュニケーションの生成

○ 徳島文理大学 桃井 克将 (008371)

岩城 由幸 (徳島文理大学・008073)、富澤 彰雄 (徳島文理大学・008549)

キーワード3つ：社会福祉士養成教育、沈黙、受容

1. 研究目的

「沈黙」とは、大辞林第三版において「口をきかないこと。黙っていること。」とされている。このような「沈黙」について、現場では度々触れ合うことになるだろう。現場で上手く「沈黙」に対応するため、福祉専門職養成校においても、講義内に「沈黙」に関する内容を取り込んでいる。先行研究においては、例えば看護系の学生では、コミュニケーション演習においてコミュニケーション技術の到達度では、非言語的コミュニケーション（ノンバーバルコミュニケーション）の活用や沈黙の意味を理解し的確に対応することを評価する得点が低かったとされている（奥山、2007）。社会福祉士養成課程においても「沈黙」の意味を理解することの困難さ等について考えていくことが求められる。そこで、本報告では、A大学にて実施した演習の中から、ひとつの事例を取り上げ、その意義を考察するとともに「沈黙」の意味について考える。

2. 研究の視点および方法

「二人でひとつの絵を描く」ことをテーマに、ランダムに選ばれた二人に、無言で自由に24色クレパスを使用して画用紙に絵を描いてもらった。絵のテーマはなく、何を描いてもよいものとした。時間は20分として、『言葉を発さないこと』を条件に、その他身動きは取れるものとした。20分経過後、対象者各々に「絵を描く際に注意を払ったこと」と「描き終えて感じた課題」について構造化インタビューを行った。対象者二人は、両者とも右利きである。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて行っている。対象者2名に対し、「研究倫理指針」「B事例研究」7に則り、前もって文書で承諾を得ている。

4. 研究結果

二人は、無言の中、はじめはどちらから描けばよいのか迷う様子であったが、片方が描き始めると、それに合わせる形で、もう一方が描いていく様子であった。インタビュー結果は、以下のとおりである。

	絵を描く際に注意を払ったこと	描き終えて感じた課題
対象者 a	<ul style="list-style-type: none"> * 率先して書き始めるようにした * アイコンタクト・ジェスチャー等、会話以外のコミュニケーションをとる * 相手にも分かるような世界観で描く 	<ul style="list-style-type: none"> * 譲り合いと協力
対象者 b	<ul style="list-style-type: none"> * 相手の顔を見て確認、様子をうかがう * 不安になった際は、ジェスチャーで確認 	<ul style="list-style-type: none"> * もっとジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーションを取ればよかった

5. 考察

人が他者とバーバルコミュニケーションによって関係を持つ際、「沈黙」はマイナスのイメージを持たれがちである。「沈黙」について、鳥居は、ブランショとメルロ＝ポンティという二人の学者を例に、『饒舌に世界を語る』ことと『「世界の不在」を暴き出す』ことの二つの解釈がされていると述べ、言葉というものの奥深さを説いており、「沈黙」は、『黙ることの中から新たな世界を導き出そうとする側面』と『黙ることによって虚無・空虚な状態に陥る側面』の二つの状態として解釈が出来るとしている（鳥居、2006）。また、「沈黙」について『自分の考えを更新するための沈黙であり、考えるシンボルとしての沈黙であったということ』（武藤、2013）と述べられている点を踏まえ、「沈黙」を「新たな物事を考え導き出すとき」と理解するとすれば、今回の『「沈黙」の中で絵を描いた事例』の場合においても、“互いに新たな状況を考えている時間”を「沈黙」と考えることが出来よう。二人が互いに新たな時間を作り出そうとして、互いの内面を把握しようとする営みがジェスチャーなどのノンバーバルコミュニケーションに現れているのかもしれない。

本研究では、対象者 a が絵を描く際に、相手にも分かるような世界観で描くことに注意を払ったとしており、対象者 b についても相手の顔を見て様子をうかがうことに注意を向けている。このような考えも、相手と同じ時間を共有する中で、何らかの世界観を作り出し、新たな物事（この場合は絵画という成果物）を創出しようとするところから生まれた気持ちのように思われる。

描き終えて感じた課題として、譲り合いや非言語的コミュニケーション（ノンバーバルコミュニケーション）について述べられているが、より相手の立場を考えることが重要であったと対象者が考えた上での課題点であると思われる。今回の事例において、はじめは対象者は各々の様子をうかがい、どうすればより良い絵になるかと考えていたせいか、顔を互いに合わせたりすることが少なかったが、時間が経つにつれジェスチャーなども入り、「新たな世界を導き出そう」という雰囲気が見られるようになった。「沈黙」に関しては、ネガティブに捉えられがちであるが、「沈黙」を経験することで、新たな考えや相手とのやり取りに必要な事柄を学ぶことが出来るように思われる。

本研究では、社会福祉士養成課程における取り組みに焦点を当てたが、今後、「沈黙」状態について検討することで、ソーシャルワークにおけるノンバーバルコミュニケーション等の可能性も明かすことが出来ると考えられる。

※参考文献等は、当日記す。